

「そこで、私は言うておくが、不正の富で友達を作りなさい。そうすれば、富がなくなったとき、あなたがたは永遠の住まいに迎え入れてもらえる。ごく小さなことに忠実な者は、大きなことにも忠実である。ごく小さなことに不忠実な者は、大きなことにも不忠実である。だから、不正の富について忠実でなければ、誰があなたがたに真実の富について任せるだろうか。」（ルカ16：9～11）

主イエスは弟子たちに譬えを語られた。ある金持ちに一人の管理人がいた。彼が主人の財産を無駄遣いしていると、告げ口をする者があった。主人は、彼を呼びつけて、「お前について聞いていることがある。どうなのか。会計報告を出しなさい。もう管理を任せしておくわけにはいかない」と問い質した。彼は無駄使いが発覚したと知って、「どうしようか。主人は私から管理の仕事を取り上げようとしている。土を掘る力もないし、物乞いするのも恥ずかしい。そうだ。こうすれば、管理の仕事をやめさせられても、私を家に迎えてくれる人がいるに違いない」と、一策を思い付いた。主人に借りのある人を一人一人呼び出して、最初の人に「私の主人にいくら借りがあるのか」と聞いたら、「油百バトス」と答えたので、「これがあなたの証文だ。早く座って、五十バトスと書きなさい」と書き直させた。1バトスは23リットルだから、1150リットル値引きした。別の者には、「あなたは、いくら借りがあるのか」と問うと、「小麦百コロス」と言うので、「これがあなたの証文だ。八十コロスと書きなさい」と言って、書き換えさせた。1コロスは230リットルなので、4600リットル値引きした。借りた額を大きく減じて、恩を売った訳である。

主人は、管理人の不正なやり方を聞いて、「この世の子らは光の子らよりも、自分の仲間に対して賢く振舞っているからだ」と褒めた。主人は大損をしている訳だから、常識的には、管理人を叱りつけるところである。何と、寛容で太っ腹な主人であろうか。

主イエスは、「そこで、私は言うておくが」と傾注させ、「不正の富で友達を作りなさい。そうすれば、富がなくなったとき、あなたがたは永遠の住まいに迎え入れてもらえる。ごく小さなことに忠実な者は、大きなことにも忠実である。ごく小さなことに不忠実な者は、大きなことにも不忠実である。だから、不正の富について忠実でなければ、誰があなたがたに真実なものを任せるだろうか」と言われた。

この「不正な管理人のたとえ」は主イエスの言葉、著者ルカの注解、他福音書からの引用などが混在し、統一性に欠け、理解し難い箇所である。要は、道徳的な範疇で解釈するのではなく、終末論的な視点で読むべきであろう。この世の子らは、世俗的利益を求め、あくなき努力をしているが、神を信じ、神の光に照らされている子らは、「神の国」のために、この世の富を賢く用いるべきである。終末時には、お金は役目を果たさなくなるので、この世に在る間、この世の富を活用して、友だちを作りなさいと、弟子たちに語ったものと思われる。小事に忠実な者は大事にも忠実である。真に自分のものとならないこの世の富という小事を賢く用いて、永遠に自分のものとなる真実の富を得る大事に備えなさい。「どんな召し使いも二人の主人に仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛するか、一方に親しんで他方を疎んじるか、どちらかである。あなたがたは、神と富とに仕えることはできない」という言葉が締めくくりで、神の国に迎えられる終末を目指して、この世の富を用いて、友を作り、神の命に与ることに心を向けなさいと言われたのである。